新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業

感覚をひらく

令和4年度 実施報告書

はじめに

「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」は、令和４年度で６年目となりました。この事業では、見える、見えないに関わらず美術館をより多くの方々に身近に感じていただくため、身体感覚を用いたワークショップや作品鑑賞ツールの開発を進めています。今年度は文化庁の「Innovate MUSEUM 事業」に採択され、京都国立近代美術館の所蔵作品を手でふれて鑑賞するプログラムや、盲学校と連携した事業、また美術館現場の方々との研究会などを実施してまいりました。本事業の推進に温かいご支援、ご協力をいただきました皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

本事業の特徴は、京都国立近代美術館が地域の盲学校、大学、作家、専門家と連携して取り組んでいる点にあると考えています。例えば、「ABC プロジェクト」として、作家、視覚障害のある方、美術館の三者が連携して、所蔵作品を目で見るだけに限らない方法で楽しむ鑑賞プログラムを開発しています。また、デザイナーや視覚障害のある方と協力し、「さわるコレクション」という鑑賞ツールの制作にも取り組んでいます。さまざまな方と手を携えて美術鑑賞の新しい方法を探ることで、美術館自体の可能性も開かれていくことを願っています。

また近年では急速に変化する社会において、美術館がいかに地域の文化や人びとをつなぐ存在となれるかが問われています。当館を中核とした協働関係はいまだ構築の途上ですが、「感覚をひらく」の実践がこれからの美術館が担う社会的役割の一つの方向を示していくと自負しております。

さて、本冊子は令和４年度の実施事業の一端を報告するものです。ぜひご高覧いただき、多くの方に「感覚をひらく」事業を知っていただく機会になれば幸いです。

令和５年３月末日

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会
委員長（京都国立近代美術館長）
福永　治

本書は、新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会による「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」の、令和 4 年度の取り組みの記録と成果の報告書である。
本書の編集は、京都国立近代美術館教育普及室がおこなった。
本事業ならびに本書の刊行は、「令和 4 年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受けた。

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会

委員長	福永　　治	京都国立近代美術館長
副委員長	田渕　茂彦	京都府立盲学校副校長
委員〔50 音順〕	佐藤　優香	東京大学大学院情報学環客員研究員
	塩瀬　隆之	京都大学総合博物館准教授
	辰巳　明久	京都市立芸術大学ビジュアルデザイン研究室教授
	広瀬 浩二郎	国立民族学博物館准教授
	四元　秀和	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課 文化力活用創生担当課長
	渡邉　美香	大阪教育大学表現活動教育系美術・書道教育部門准教授
監事	髙木　秀夫	京都府健康福祉部障害者支援課参事（精神・社会参加担当）

はじめに……1

1. 「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」について……4

1-1　概要……4
1-2　活動実績……5

2. ABC プロジェクト……6

2-1　概要……6
2-2　エデュケーショナル・スタディズ 03「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」……7
2-3　「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」関連プログラム「ABC、ただいま在室中。」……8
2-4　京都府立盲学校と京都国立近代美術館との連携事業「さわって、つくって、ひもとく　寛次郎さんのかたち」……9
2-5　2022-23 年度　ABC プロジェクト……13

3. さわるコレクション……14

3-1　概要……14
3-2　「さわるコレクション　11・12」の制作に向けて……14
3-3　「さわるコレクション」を活用したプログラムの実施……15

4. 身体感覚で楽しむプログラム……20

4-1　手だけが知ってる美術館　第 5 回　清水九兵衛／六兵衛……20
4-2　筑波大学附属視覚特別支援学校　修学旅行……23
4-3　「甲斐荘楠音の全貌」展 鑑賞プログラム「シュワー・シュワー・アワーズ　手話と日本語で鑑賞を楽しむ会」……25

5. CONNECT ⇄＿　アートで こころを こねこねしよう……26

5-1　『手でふれてみる世界』上映会＆トーク……27
5-2　「無視覚流」で楽しむ！ 京風まちあるき……29
5-3　筆談鑑賞会「かく⇄みる⇄つながる」……33

6. 研究会「ひらくラボ」……36

おわりに……38
【付録】新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会規約……39

1.「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」について

1-1 概要

「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」は、京都国立近代美術館が中核館となり、地域の盲学校、大学、博物館等と連携して平成 29（2017）年度から実施している取り組みである。事業目的は、「みる」ことだけにとらわれず触覚や嗅覚、聴覚や対話を用いた鑑賞活動を試行することで、見える／見えないに関わらず誰もが享受できる（ユニバーサルな）作品鑑賞のあり方を模索することとしている。さらに、美術館をさまざまな背景や感性を持つ人たちが関わり合う場としていくこともねらいとする。

令和 4 年度事業の概要は以下の通りで、一部は文化庁「Innovate MUSEUM 事業」の助成を得て実施した。

■ ABC プロジェクト

京都国立近代美術館の所蔵作品について、多様な感覚を使って理解を深め新たな魅力を発見する鑑賞プログラムの開発を目指す取り組み。実働の枠組みとして、作家（Artist）、視覚障害のある方（Blind/ partially sighted）、美術館（Curator）による協働関係を構築し、三者がそれぞれの専門性や感性を生かしながら携わる。

■さわる鑑賞ツール「さわるコレクション」

「さわるコレクション」は、京都国立近代美術館の所蔵作品について、触図と文章でその特徴を紹介する触察ツールで、視覚障害のある当事者や作家・印刷会社と協働して制作する。 1 作品あたり 1,000 部制作し、全国の盲学校、ライトハウス、点字図書館を中心に配布する。

■身体感覚で楽しむプログラム

過去の事業で構築した、さわる・きく・対話するといった方法による作品鑑賞プログラムや盲学校との連携事業を継続的に行い、その意義や効果等を幅広く発信する。

■「CONNECT ⇄__」プログラム

障害者週間（毎年 12 月 3 日～ 9 日）にあわせて岡崎公園一帯で開催される、共生社会や多様性について考えるプロジェクト「CONNECT ⇄__」に京都国立近代美術館として参画し、障害のある・なしに関わらず共に参加できるワークショップ等を実施する。

● 実 施 中 核 館 ：京都国立近代美術館

●その他の協力団体：大阪教育大学／京都市／きょうと障害者文化芸術推進機構／京都市立芸術大学／京都大学総合博物館／京都府立盲学校／国立民族学博物館（以上、50 音順）

1-2 活動実績

2022年3月18日（金）～5月15日（日）	●エデュケーショナル・スタディズ03「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」
4月29日（金・祝）	●「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」関連プログラム「ABC、ただいま在室中。」［於：京都国立近代美術館4階コレクション・ギャラリー］
5月11日（水）	●筑波大学附属視覚特別支援学校 修学旅行プログラム［於：京都国立近代美術館・京都市京セラ美術館］
9月10日（土）	●手だけが知ってる美術館 第5回 清水九兵衛／六兵衛（企画展「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」関連プログラム）［於：京都国立近代美術館1階講堂・3階企画展示室］
9月下旬～	● ABCプロジェクト検討開始
10月～	●さわる鑑賞ツール「さわるコレクション」検討開始
10月18日（火）	●京都府視覚障害者社会教育指導者研修会（乙訓会場）「さわる・かんじる・かたりあう～「感覚をひらく」プログラムから～」［於：長岡京市中央生涯学習センター］
10月24日（月）	●第1回実行委員会［於：京都国立近代美術館1階講堂およびオンライン］
11月～	●「さわるコレクション」サンプル制作開始
12月3日（土）	●『手でふれてみる世界』上映会＆トーク［CONNECT⇆_プログラム／於：京都国立近代美術館1階講堂］
12月4日（日）	●「無視覚流」で楽しむ！ 京風まちあるき［CONNECT⇆_プログラム／於：京都国立近代美術館ほか岡崎エリア］
12月18日（日）	●筆談鑑賞会「かく⇄みる⇄つながる」［CONNECT⇆_プログラム／於：京都国立近代美術館1階講堂・ロビー］
12月20日（火）	●京都府立盲学校ワークショップ「さわって、つくって、ひもとく　寛次郎さんのかたち」［於：京都府立盲学校高等部 多目的室］
2023年 2月14日（火）	●「さわるコレクション」第1回サンプル完成
2月16日（木）	●奈良県立盲学校 美術作品鑑賞会［於：奈良県立盲学校 体育館］
3月11日（土）～12日（日）	●研究会「ひらくラボ」［於：京都国立近代美術館1階講堂］
3月26日（日）	●企画展「甲斐荘楠音の全貌」展 鑑賞プログラム「シュワー・シュワー・アワーズ　手話と日本語で鑑賞を楽しむ会」
3月29日（水）	●第2回実行委員会［オンライン実施］

2. ABC プロジェクト

2-1 概要

「ABC プロジェクト」とは、2020 年度に立ち上げた鑑賞プログラム開発の取り組みである。ABC とは作家（Artist）、視覚障害のある方（Blind/ partially sighted）、学芸員（Curator）の頭文字から取っている。三者が専門性・経験・感性を生かしながら、京都国立近代美術館の所蔵作品をさわる・きく・対話するといった方法で読み解き、それを様々な人が体験できる鑑賞プログラムとして公開していくことを目指している。

第 1 弾は石黒宗麿（1893-1968）の作陶について、残された陶片を触察して言葉にすることで読み解いていく「ツボ _ ノ _ ナカ _ ハ _ ナンダロナ？」を開発し、美術館での展示（2020 年 12 月～ 21 年 3 月）ならびにウェブサイト「ABC コレクション・データベース Vol.1 石黒宗麿陶片集」を公開した。

第 2 弾は河井寛次郎（1890-1966）の仕事と暮しをテーマに、河井寛次郎記念館の協力を得ながら、作家が暮らした空間や彼の愛用品、切り抜いていた新聞記事などをひも解いていくことで、寛次郎の作品づくりを考察するプログラムを検討した。成果公開として、エデュケーショナル・スタディズ 03「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」と題した体験型展示（2022 年 3 ～ 5 月）と、ウェブサイト「ABC コレクション・データベース Vol.2 河井寛次郎を眼で聴き、耳で視る」を公開した。

2022 年度は上記の「眼で聴き、耳で視る」の展示を引き続き実施した（2-2）ほか、会期中のイベントとして、ABC メンバーが訪れた来場者と対話しながら作品を鑑賞するプログラムを行った（2-3）。さらにアウトリーチの可能性を探るため、京都府立盲学校と連携した出張授業を実施した（2-4）。

また第 3 弾の取り組みとして、抽象絵画の世界を視覚以外の感覚で味わうことをテーマとして、ABC による企画検討とリサーチを行った（2-5）。

2-2 エデュケーショナル・スタディズ 03「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」

日　　時｜ 2022 年 3 月 18 日（金）～ 5 月 15 日（日）
会　　場｜京都国立近代美術館 4 階コレクション・ギャラリー内
特別協力｜河井寛次郎記念館
制作協力｜什器製作：タケダ工作所
　　会場グラフィックおよびチラシ・ウェブサイト制作：Studio Kentaro Nakamura
来場者数｜ 13,375 名（コレクション展の来場者数）
ウェブサイト｜ https://www.momak.go.jp/senses/abc/kanjiro/
会場撮影｜表恒匡

■実施報告

「ABC プロジェクト」の 2 年目の成果公開として、河井寛次郎（1890-1966）が晩年に制作した《三色打薬陶彫》（1962 年）に焦点を当て、「暮しが仕事 仕事が暮し」という寛次郎の言葉（『いのちの窓』1948 年）等を手がかりに、寛次郎の暮しぶりに触れていくことでその造形感覚を読み解いていく展示を実施した。

会場では、寛次郎が切り抜いた新聞記事をはじめ、安原理恵氏が河井寛次郎記念館の物品をふれて鑑賞した音声、それをもとに中村裕太氏が制作した手でふれる造形物を設えた。そうした空間のなかで「さわる」「きく」などの感覚を使って、寛次郎の作品づくりを新たな角度からひも解いていくことを目指した。

また本展示とあわせて、寛次郎の仕事と暮しを ABC それぞれの視点から考察したウェブサイト「ABC コレクション・データベース Vol.2 河井寛次郎を眼で聴き、耳で視る」も公開した。

2-3「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」関連プログラム「ABC、ただいま在室中。」

日　　時｜ 2022 年 4 月 29 日（金・祝）10：00 ～ 16：00
会　　場｜京都国立近代美術館 4 階コレクション・ギャラリー
対　　象｜どなたでも
参 加 者｜ 93 名
ファシリテーター｜中村裕太（作家）、安原理恵、松山沙樹（京都国立近代美術館研究員）
撮　　影｜守屋友樹（映像・スチル写真）

■実施報告

エデュケーショナル・スタディズ 03「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」の会場に ABC プロジェクトメンバーの中村裕太氏、安原理恵氏が在室し、訪れた来場者とともに作品を囲んで対話しながら鑑賞を深めるプログラムを実施した。

展示空間に設えたさわる作品は、河井寛次郎記念館で安原氏が触察した家具や愛用品などと関連している。安原氏・中村氏は、来場者の質問などに答えつつ、記念館で過ごした際の経験やそこからイメージした河井寛次郎の暮しや作品の魅力について共有しながら、さわる作品を共に鑑賞した。訪れた人々にとって、対話を通してひとつひとつの作品をゆっくり手でふれて味わい、河井寛次郎が暮らした空間や作品づくりに自分なりに思いを馳せる機会になったのではないだろうか。

2-4 京都府立盲学校と京都国立近代美術館との連携事業「さわって、つくって、ひもとく　寛次郎さんのかたち」

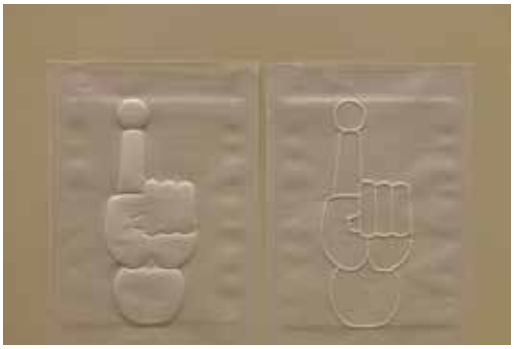
■概要

「感覚をひらく」事業では、盲学校における鑑賞教育の充実を目指し、2018 年度から京都府立盲学校との連携事業を行っている。第 4 弾となる今回は、2021 年度の ABC プロジェクトで開発した「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」をもとにワークショップを企画し、盲学校高等部への出張授業として実施した。

日　　時｜ 2022 年 12 月 20 日（火）10：40 ～ 12：20（3・4 時間目）
　　（教員を対象としたプレ授業を 12 月 6 日に実施）
会　　場｜京都府立盲学校高等部　多目的室
参　加　者｜ 10 名（内訳：単一障害クラス 5 名（全盲 3 名、弱視 2 名）、重複障害クラス 5 名）
実施チーム｜中村裕太（作家）、京都国立近代美術館（松山沙樹、牧口千夏、吉澤あき）
　　京都府立盲学校（岩井洋志、長谷部光二、水野貴子）
協　　力｜ヤマトロジスティクス京都
撮　　影｜麥生田兵吾（スチル写真）、鈴木啓介（映像）

■実施報告

当日の活動は、単一障害・重複障害クラスの生徒を混ぜた 2 グループになり、ござのマットの上に丸くなって座って行った。また事前資料として、河井寛次郎の略歴等を簡単にまとめたテキスト、および当日に鑑賞する《ブロンズ像「木彫　玉に手」》の触図を美術館が用意した。



Easy Tactix で制作した触図

<u>自己紹介・導入</u>

学校側からの趣旨説明・講師紹介のあと、生徒・スタッフ全員で自己紹介を行った。

続いて「河井寛次郎さんってどんな人？」ということで、作家の簡単な略歴と、彼の仕事場兼生活空間であった場所が「河井寛次郎記念館」として残されていることなどを紹介した。

鑑賞１

つづいて、美術館が所蔵する河井寛次郎の《ブロンズ像「木彫　玉に手」》を手で触れて対話しながら鑑賞した。

円状に座った中央に作品が来ると、生徒たちはいっせいに手を伸ばして下から上までまんべんなくさわっていた。そして、人間の手を表しているということや、指先に玉のようなものが乗っているという形だと分かると、自身の手で同じ形をしてみたり、「なんでこんな形を作ったのだろう？」と意見を交わしたりしていた。

なお手をモチーフにした彫像は寛次郎の晩年の代表作のひとつであり、木彫や陶芸のバリエーションが存在している。本作は記念館の開館 15 周年の折に木彫作品から鋳造製作されたものである。

ブロンズ像「木彫　玉に手」をあちこちからさわる

「眼で聴き、耳で視る」プログラムにおいては、同じく手の上に玉が乗っている《三色打薬陶彫》を中心的な作品として取り上げていた。しかし今回の出張授業では作品を美術館の外へ持ち出すということ、そして複数人で同時にさわって鑑賞することなどから安全面を考慮し、ブロンズ製の本作を活用した。

制作活動

つづいて、粘土による造形活動を通して、寛次郎の暮しと作品づくりについてさらに具体的に考えていった。

まず粘土に慣れるため、指でつまむ、こぶしで叩く、ちぎる、上から落とすといった何らかの「アクション」を加えて、粘土を自由に変形させる活動を行った。ここでも引き続き５名ずつ丸くなった状態で進め、1 アクション加えるたびに隣の人に粘土を渡していくという方法を取った。人によって表現が異なることの面白さや、自分が作ったものが意図しない形にどんどん変化していく偶然性も楽しみながら進めていった。

粘土に慣れてきたところで、本題へ。寛次郎が自ら制作し、現在は記念館に展示されている《木彫像 脇息 狛犬》をテーマに粘土による造形を行った。ここでは、ABC プロジェクトのメンバーである安原理恵氏が記念館で《木彫像 脇息 狛犬》をさわって鑑賞した際の音声を再生し、生徒たちはそれをヒントにしながら粘土で形をつくっていった。

粘土をちぎってどっしりとした足を作ったり、粘土を細長くのばしていったり、胴体部分を一生懸命にくり抜いたり、それぞれ自由に造形を進める

この活動でも１～２個のアクションを加えたのちに隣の人に粘土を回していった。隣から粘土が来たとき、まずは形をそっとさわって観察し、「前の人は何をイメージして作ったのだろう？」と思いを馳せる姿もあり、言葉ではなく、形を通してメッセージをやり取りしている様子が印象的だった。

この作業を３回ほど繰り返したのち、「最後の１アクションは、他の人との対話を一旦やめて、自分の前にある粘土と向き合って仕上げをしてみよう」と中村氏が語りかけ、最後は静かな時間のなかで制作が進んだ。こうして 10 個のかたちが出来上がった。

鑑賞２

最後は、中村氏が《木彫像 脇息 狛犬》をもとに制作したやきものの作品をふれて鑑賞した。生徒たちは中村氏の解説を聞きながら、胴体や顔、足の形や、蓋と身とが分かれるようになっていること、内側に飴玉を模した小さな球体が入っていることなどを味わった。

今回の活動では、河井寛次郎の作品を鑑賞を通して味わい、制作活動を通して彼の暮しぶりにも思いを馳せる機会になることを目指した。音声を頼りに進めた造形活動は、言語による把握、頭の中で想像する力、造形を行う能力を柔軟に組み合わせるという創造的な活動であったが、教員のサポートもあり、手を止めたり飽きたりすることなく各自のペースで取り組んでいたように見受けられた。

また今回の授業に向けては、講師・美術館・盲学校で打ち合わせを２回実施し、さらに学校側からの提案により教員対象のプレ授業も行った。プレ授業を通して活動の見通しやねらいを共有することができたほか、支援が必要な生徒への個別のサポートについて、学校側で事前に検討を行っていただいた。盲学校の先生方が、担当者が変わっても学校全体として美術館と顔の見える関係性を築こうと努めてくださったおかげだと感じている。今後も引き続き関係性を維持しながら、双方の強みを生かした事業を定期的に行っていきたい。

出来上がった生徒たちの作品。後日、中村氏が焼成した。

主な感想・フィードバック

〈参加した感想について〉

・人によって作る形が違って面白かった。物をとなりの人に渡して、共同で作るのは初めての経験だった。

・粘土での形制作が、自分の感性とリンクして面白いなぁと思いました。

・みんなそれぞれの個性を見られてとても楽しかったです。

・粘土を投げたり好きにさわれたのがよかった。

〈河井寛次郎さんについてどんなイメージを持ちましたか？〉

面白い作品を作る人だった。／寛次郎さんの感性に惹かれた。／とても偉大な美術家なんだろうなというイメージです。／非常にクリエイティブな人だと感じました。／雨が好きな人なのかなーと思った。

〈教員からのフィードバック〉

・生徒に新しい経験をさせられたこと／普通科の生徒の交流の機会になったこと／学校の教員以外の大人の方たちと生徒が直接やりとりをしたり触れ合ったりする機会になったこと。

・1 人が 1 つの作品を制作するのではない手順に感心しました。発達段階や手先の器用さの差が大きい支援学校に合った方法だと思いました。

・寛次郎の作品に触れ、「この指止まれの形や！」と、生徒が叫んだのを聴いた時は驚きました。ほんまもんをいっぱい体験させたいですね。

・指導者も事前授業のときにアイマスクをしていれば生徒の気持ちに少し近づくことができるではないかと思う。

・事前授業で知っておいたことで生徒への言葉がけや身体支援で悩むことがなくてよかった。

2-5 2022-23 年度　ABC プロジェクト

■概要

2022-23 年度は ABC プロジェクトの第 3 弾として、抽象絵画を視覚に依らずに味わう方法を探るための検討・リサーチを重ねた。取り上げる作品は、長谷川三郎《蝶の軌跡》（1937 年、京都国立近代美術館蔵）である。実施メンバーとしては、過去 2 回のプログラム開発の成果と課題を踏まえた活動とするため、引き続き、作家の中村裕太氏、安原理恵氏と協働した。

平面作品を視覚に依らずに鑑賞する方法として、近年、言葉による対話鑑賞や、絵の構図やモチーフを凹凸で表現した触図をさわる方法などが実践されている。しかし抽象絵画を扱う場合、色や構図といった造形的な情報を伝えるだけでは作品の本質や作家の意図に近づいたとは言い難く、視覚に依らない鑑賞のあり方はいまだ模索段階である。

こうした状況を踏まえ、今回のプロジェクトでは《蝶の軌跡》の何を味わいたいのかについて ABC メンバーで議論を重ね、さわる・きく・かたる・想像するといった方法によって誰もが経験できるユニバーサルな鑑賞プログラムを開発することを目指し、引き続き検討を行っていく。なお、成果公開については、体験型の展示（2023 年 10 ～ 12 月）とウェブサイトの公開を予定している。

■進行プロセス

9 月下旬	中村氏と美術館の打ち合わせ、プロジェクトの方針と進行予定の確認
12 月 1 ～ 18 日	京都国立近代美術館 1 階ロビーにて、「CONNECT ⇄__」でのプレ展示 （中村裕太《岐阜チョウの道》（2018 年）を再構成して展示）
1 月中旬	中村氏と美術館の打ち合わせ
3 月下旬	《蝶の軌跡》を実見した上で、安原氏、中村氏、美術館、デザインチーム（Studio Kentaro Nakamura）での打ち合わせ

3. さわるコレクション

3-1 概要

「感覚をひらく」事業では、京都国立近代美術館所蔵のコレクションを触図（触察シート）とテキストによって紹介する「さわるコレクション」を制作している。2017 年から 2021 年度にかけて、10 作品（平面作品 7 点、立体作品 3 点）を取り上げてきた。

仕様としては、1 つの作品を触図とテキストにより表現し、それらのシートを A4 サイズのポケットファイルに収めるという統一のフォーマットを用いている。一方でプロジェクトの進め方については、前年度の課題を引き継ぎながらメンバーや方法を更新して取り組んでいる。2022 年度から 23 年度にかけては、京都市立芸術大学で「さわる名画」の実践的研究に取り組む辰巳明久氏、桑田知明氏と連携して検討を行った。

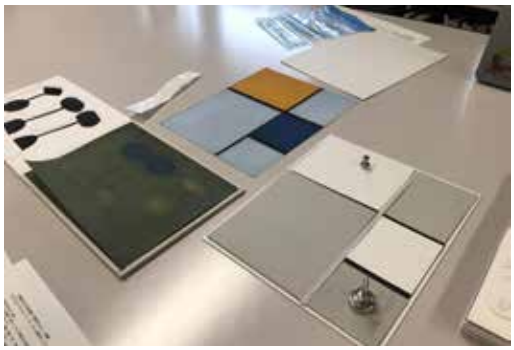
さらに既存の「さわるコレクション」の活用がいまだ途上という状況を踏まえ、今年度は 2 か所でワークショップを実施した。

3-2「さわるコレクション　11・12」の制作に向けて

プロジェクトの趣旨

2022-23 年度のプロジェクトでは、絵画を構成する「輪郭線」と「色合い」を触覚的な情報でいかに伝えるかを課題意識としている。

選んだ作品は、明瞭な輪郭線と色彩から構成されたピエト・モンドリアン《コンポジション》（1929 年）と、全体的にグラデーションのある色面で、輪郭線も曖昧な徳岡神泉《池》（1952 年）。



試作品第 1 版

2022 年度末の時点では試作品製作と検証を行った。強度の異なるマグネットシートを用いて色面やモチーフの形を表現し、その上で丸い磁石を動かすことで、引っぱられる力・反発する力を指先から感じられるような表現を検討した。

プロジェクトメンバー

企画＋デザインチーム：辰巳明久・桑田知明（京都市立芸術大学）
当事者チーム：広瀬浩二郎（国立民族学博物館）
美術館チーム：松山沙樹、牧口千夏（京都国立近代美術館）

活動の履歴

10 月 19 日	第 1 回打ち合わせ：方針検討
11 月 2 日	第 2 回打ち合わせ：作品選定とテーマ決定（表現方法の検討、試作品製作）
11 月～	試作品の製作開始
2 月上旬	京都市立芸術大学にて、広瀬氏が試作品第 1 版をさわって検証
2 月 14 日	美術館にて、試作品第 1 版をさわって検討
3 月から継続	素材の検討、試作品第 2 版の製作

3-3「さわるコレクション」を活用したプログラムの実施

■概要

「さわるコレクション」の制作のきっかけは、いまだ盲学校では図工・美術の点字・弱視者用の教科書がないという事実をヒアリングしたことであった。そこで、見えない・見えにくい方に向けた「美術館への招待状」として一作品につき 1,000 部制作し、全国の盲学校、ライトハウス、点字図書館等へ配布を続けてきた。しかし現場での活用についてはまだ途上にあるといえる。

こうした現状を踏まえ 2022 年度事業においては、視覚障害のある方を対象に福田平八郎《竹》の「さわるコレクション」を活用した鑑賞＋制作ワークショップを実施した。

10 作品の中から《竹》を選択した理由はいくつかあるが、第一に《竹》の触図の分かりやすさが挙げられる。熱入りエンボス加工により制作したこの触図は、竹の部分はざらりとした紙本来の手ざわり、背景部分は熱を加えることでつるつるとした手ざわりになっている。過去に行った利用者調査からも、モチーフと背景との境目を比較的感じ取りやすいというフィードバックがあった。こうしたことから、触図をさわり慣れていない方にも使っていただきやすいのではと考えた。

プログラムでは実物の竹も用いることにより、二次元の図だけでは伝わりづらい竹の質感や作品全体の雰囲気も、実感を伴ってイメージできるよう工夫した。

実施の概要は以下の通り。

さわるコレクション「福田平八郎《竹》」

（1）京都府視覚障害者社会教育指導者研修会（乙訓会場）

「さわる・かんじる・かたりあう～「感覚をひらく」プログラムから～」

日　　時｜ 2022 年 10 月 18 日（火）13：40 ～ 14：40
会　　場｜長岡京市中央生涯学習センター
参 加 者｜視覚障害者協会会員 18 名、社会福祉関係団体 7 名、行政関係者 5 名（その他：視察等 5 名、乙訓教育局職員 8 名）
スタッフ｜松山沙樹、吉澤あき（京都国立近代美術館）
材料協力｜長岡銘竹株式会社
主　　催｜京都府教育委員会
主　　管｜京都府乙訓教育局
後　　援｜公益財団法人京都府視覚障害者協会、京都府市町村教育委員会連合会

■実施報告

乙訓教育局から依頼を受け、長岡京は竹の名産地ということにちなんで「竹」をテーマにしたワークショップを検討した。

参加者は、視覚障害のある方・ない方の混合で 4 名ずつのグループになり、メンバーどうしで意見を交流させながら活動を進めた。

①「感覚をひらく」事業紹介

本事業で制作した京都国立近代美術館の点字・拡大文字による紹介パンフレットを配布し、美術館の所在地や周辺環境、所蔵作品等についての簡単な紹介を行った。

② さわるコレクション「福田平八郎《竹》」の鑑賞

一人ずつに、エンボス加工による凹凸印刷を施した《竹》の触図を配布。

まずは触図を手で触れてグループ内で対話をしながら、何があらわされているのかを推測してもらった。「自然の中にあるもの」とヒントを出すと、いくつかのグループからは「草」や「木」という意見が出た。

最後にこれが竹林の風景を捉えた作品であることや、作家である福田平八郎が京都の竹林を歩き回ってスケッチ行い、それをもとに作品を制作したことなどを紹介した。

さわるコレクション《竹》をふれて鑑賞

③ 本物の竹に触れながらイメージを広げる

福田平八郎《竹》は、モチーフ同士の重なりが少ないシンプルな構図で、触図化した際にも構図を比較的とらえやすい。ただしそうはいっても、触図をさわるだけでは、竹一本ずつの質感や古い・新しいという違い、作品から伝わってくる雰囲気を、実感を伴ってイメージすることは難しいと思われた。

そのため、竹垣製作などを専門にする長岡銘竹株式会社の協力を得て、作品に描かれている孟宗竹と同じ色・形の竹をご用意いただいた。参加者はそれらを手でさわり比べて、実物の竹の太さや節の形、質感、におい、重さなどを感じ取った。

本物の竹をさわった後に改めて触図をさわり直してみることで、若い竹と古い竹が描かれていることや、竹の節の部分が太い輪郭で表現されていること、また前後で重なり合って生えている竹があるといった遠近感など、より具体的に絵の世界に近づくことができた方もおられたようだった。

④ 竹のカスタネットづくり

竹のピースにやすりをかけ、組み合わせてカスタネットを作る

ワークショップの後半は、約５×７センチの竹のピースを組み合わせてカスタネットを制作した。

材料の準備にあたっては、視覚障害のある方が一人で最後まで制作が行えるように考慮し、手ざわりに特徴のある胡麻竹を用いたオリジナルのキットを、長岡銘竹株式会社にご用意いただいた。

最後に、完成したカスタネットを音楽に合わせて全員で鳴らして終了とした。

（2）奈良県立盲学校 美術作品鑑賞会

日　　時｜ 2023 年 2 月 16 日（木）13：20 ～ 15：05
会　　場｜奈良県立盲学校　体育館
参 加 者｜中学部・高等部生徒 18 名（内訳：単一障害クラス 10 名（全盲 1 名、弱視 9 名）、重複障害クラス 8 名（全盲 4 名、弱視 4 名））、教員 21 名
講　　師｜松山沙樹（京都国立近代美術館）、真下彰宏（長岡銘竹株式会社）
運営協力｜山本利和、正井隆晶（大阪教育大学 特別支援教育講座）

■実施報告

ワークショップの第 2 弾は奈良県立盲学校の協力を得て、中学部・高等部の生徒 18 名を対象に実施した。内容については、10 月の研修会での実施（前項を参照）をベースに、生徒の実態も踏まえながら学校側と協議を重ねた。特に、単一障害クラスと重複障害クラスの生徒が参加するということで、生徒たちが活動内容をひとつひとつ理解して能動的に取り組むことができるよう、ゆったりとした進行を心がけた。また絵画鑑賞だけでなく、竹の特徴やさまざまな種類の竹について詳しく知ることで、興味を広げるきっかけにもなればということで、竹の専門家によるレクチャーも行った。

① 福田平八郎《竹》の触図をじっくりさわる

まずは触図をさわって何があらわされているかを考える活動から。絵画作品の触図をさわった経験は少ないと聞いていたが、当日は、大半の生徒が飽きることなく隅々まで触図をさわっていた。「とがった部分が 1 か所ある」「四角い形がいくつも積み重なっている」など、指先で感じ取った情報を手がかりに絵の全体像を思い描こうとしたり、友達の意見を聞きながら推察を深めようとする姿が見られた。また、節が等間隔にあることや筍のような鋭利な形があることを根拠にしながら、これが「竹」をあらわしていると推察した生徒もおり、その鋭い洞察力と豊かな想像力に驚かされた。

② ③本物の竹に触れてイメージを広げる／竹の専門家からのレクチャー

つづいて本物の竹をさわって絵の世界をさらに深く味わう活動を行った。今回も長岡銘竹株式会社に協力を得て、作品に登場する孟宗竹（若い竹、老いた竹、その中間の竹）を用意した。生徒たちは竹を抱きかかえるようにして持ってみたり、手のひらで撫でるようにして触感を味わうなどして、形、手ざわり、におい、叩いた時の音など、さまざまな情報を感じとった。

特に、重複障害クラスの生徒たちが能動的に竹に手を伸ばし、熱心に触察していたことが印象的であった。

④ 竹のカスタネットづくり

最後は、10 月の実施と同様に、カスタネットづくりを行った。

やすりをかける作業などサポートが必要な場面は担当教員が支援を行ったが、およそ 25 分間のなかで全員が完成させることができた。

これら 2 回の活動では「さわるコレクション」を通して、見えない方々に京都国立近代美術館の所蔵作品に親しんでいただくきっかけを作ることができた。また、実物の竹をさわる活動と組み合わせることにより、作品の世界をよりリアリティを持って感じ取れることも目指した。当日の参加者の反応からは、触図と実物の竹の活用により、より多角的な作品理解に近づいていたことがうかがえた。

一方で、触図を体験する際に「どこからさわると形が掴みやすいか」「どのように指を動かすと良いのか」といった触察方法についての具体的なナビゲーションがあれば、より効果的な鑑賞が可能になったであろう。作品の何をどう伝えるかを吟味し、その狙いにあわせて触図を活用することは、今後の課題である。

もう一点の課題としては、福田平八郎《竹》の鑑賞活動と、後半のカスタネットづくりの活動のねらいが切り離されたものになってしまった点だ。今後は、活動の一貫性を考慮し、鑑賞と制作を行ったり来たりするようなプログラムづくりにも努めたい。

4. 身体感覚で楽しむプログラム

4-1 手だけが知ってる美術館　第５回　清水九兵衛／六兵衛

■概要

企画展「生誕 100 年 清水九兵衛／六兵衛」に関連して、清水九兵衛／六兵衛（1922-2006）の作品を手でふれて対話しながら鑑賞するワークショップを開催した。

清水九兵衛／六兵衛は、視覚障害のある方の美術鑑賞をめぐるトークの中で「触覚だけの世界で確かめられた触覚感と、我々が視覚のうえで言っている触覚感とは、どこかにずれがある」と話している（『彫刻に触れるとき』用美社、1985 年より）。この作家の言葉をもとに、手でふれることと目で見ることで作品の印象はどんな風に変わるのか、またそれらが組み合わさることでどのように作品理解が深まっていくのかを、さわる・きく・みる・しゃべるといった活動を通して参加者とともに考えることを目指した。

日　　時｜ 2022 年 9 月 10 日（土）① 10：30 ～ 12：00　② 14：00 ～ 15：30
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階講堂・3 階企画展示室
参　加　者｜①参加者 12 名（うち視覚障害あり 4 名）、介助者 2 名
　　②参加者 13 名（うち視覚障害あり 9 名）、介助者 2 名
ナビゲーター｜大長智広、松山沙樹（京都国立近代美術館）
ス タ ッ フ｜牧口千夏、宮川智美、吉澤あき（同上）
撮　　影｜衣笠名津美（スチル写真）、鈴木啓介（映像）

■実施報告

当日は、視覚障害のある方 1 ～ 2 名が入るような 4 名ずつのグループを作り、各グループに美術館の研究員が 1 名入って活動を進めた。

まずは全体で趣旨説明を行い、手や腕を動かして簡単な準備体操。その後、グループごとに自己紹介を行ってから活動に入った。

<u>清水九兵衛／六兵衛について（レクチャー）</u>

鑑賞を始める前に、展覧会を担当した研究員がレクチャーを行った。陶器の作品を発表する際は「六兵衛」の名前で、金属の彫刻作品などは「九兵衛」の名前で発表していたことや、土は「しゃべりすぎる、饒舌な」素材であると捉えていたのに対し、金属は自分の方に近づいてきてくれる素材であると考えていたことなどが、鑑賞を行う上でのヒントとして紹介された。

鑑賞１：陶器作品を鑑賞

ここでは陶器でできた４点の作品を用意し、グループごとに１点ずつ鑑賞した。いずれも花器であり、成型したあとに切り込みが入れられていたり、複数に分かれたプレートが重なりあうような表現があったりと、オブジェのような抽象的な形をしている。

参加者はまずアイマスクを着用して、手の感覚を使って形や質感を確かめることから鑑賞を始めた。さまざまな角度からふれてその形を思い描き、さらに底の部分や内側部分も丁寧にさわって素材を確かめる。発見したことや感じた印象をグループのメンバーどうしで語り合って、みかたを深めていった。

つづいてアイマスクを取り、見える人は色の情報や視覚で捉えた形の印象なども言葉で伝えあいながら鑑賞を続けた。視覚も使いながらの鑑賞では、「どんな花を生けたら良いと思いますか？」「水はここから入れるのかな」など、用途に関する発言が多く出ていたグループもあった。

「着物を着ている人のよう」などの感想があった

また視覚障害のある方からは、自分は形から作品の印象をとらえていたが、見える人たちは、さわって得る情報よりもむしろ色の情報から作品を具体的に把握していこうとすることに驚いたという感想もあった。

鑑賞２：金属の彫刻作品を鑑賞

つづいては、３階の企画展示室に移動し、展示されているアルミ製の《FIGURE》（京都国立近代美術館蔵）を鑑賞した。

この作品は横幅６メートルほどあり、まずは作品のまわりを一周して全体像を把握することから鑑賞を始めた。続いて研究員から、曲面の部分はいくつかの鋳型を使って制作されていることや、アルミの板の部分はヘアライン加工という細い筋の仕上げがなされ、それによってアルミ本来の光沢が抑えられ光の反射がコントロールされていることなどの解説があった。参加者は、なだらかな曲面や表面の粒々としたテクスチャーの手ざわり、またヘアライン加工に特有の細かい線の跡などを、指先の感覚に集中しながら丁寧に触れた。

今回、視覚だけでなく触覚も活用しながら作品をみることで、作家の息遣いや制作の工夫にふれ、“土は饒舌な素材、金属は自分の方に近づいてきてくれる素材”という思いを、よりリアリティを伴って感じられる機会になったのではないだろうか。

主な感想

・他者の鑑賞を言葉できかせてもらうのがとてもおもしろく、「どんなのだろ？」と作品について想像するのも「こんなふうに見えて（さわって）いるんだ」と、ちがう見方、感じ方を知るのもとてもたのしかった。

・見えない状態で想像していた素材や質感とまったく違うものがあり、驚きがありました。見えない方から「ここがほら、穴があいているよ」など、教えてもらいながら鑑賞できたのも楽しかったです。／目で見て感じることを見えない方にシェアしたところ「そう聞くと触った印象が変わってきた」とおっしゃっていたのも印象に残りました。

・入館すぐに展示してあった九兵衛作品の模型をさわって鑑賞させていただきたかったです。大きい作品はさわってイメージがわきづらいと思いますので、あのくらいの模型をさわるのはとっても良いのに、と思いました。とても残念です。

・もちろん一緒のグループの人たちといろいろな意見を出し合って面白かったですけど、ちょっともの足りないような感じがしました。ひとつは、ちょっと作品が少なくて清水九兵衛さんの作品の特徴がつかめたのかなあと思いました。それと、私たちのグループは、私と友人と、それに弱視の方々、それと美術館のスタッフの方で、もっといろいろな方々がいればさらに違った見方など聞けるのかなあと思ったりしました。

・視覚障害者は、その場にどんなかたがいらっしゃるのかわかりません。コロナ禍が長く続き、外出の機会が乏しい今日なのでなおさら、せっかくの集いの機会、最初の自己紹介は全員で行うなど、どんな方々とご一緒なのか感じたかったです。感想もみんなでひとことずつ共有し、いろんなかたと感覚をわかちあえたらもっとよかったと思います。

・このような機会がなければ「見たつもり」ですーっと「見る」ことになったと思います。さわること、障がいがある方と一緒に「見る」ことで豊かな「見る」が体験できました。

4-2 筑波大学附属視覚特別支援学校　修学旅行
「美術館ってどんな音　作って鳴らそう建築楽器　Season 03」

■概要

2019 年に続き、2022 年度も筑波大学附属視覚特別支援学校が修学旅行で京都国立近代美術館を訪れた。過去に実施した美術館建築をテーマにしたワークショップをベースに、今回は向かいにある京都市京セラ美術館の協力も得て、ふたつの美術館建築の特徴を比較しながら身体感覚で味わうプログラムを行った。

日　　程｜ 2022 年 5 月 11 日（水）13：00 ～ 16：00 頃
会　　場｜京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館
参 加 者｜中学部 3 年生 8 名（全盲 3 名、弱視 5 名）、教員 4 名
スタッフ｜松山沙樹、牧口千夏、吉澤あき（京都国立近代美術館）
　　富塚絵美、藤田龍平（京都市京セラ美術館ラーニング担当）
撮　　影｜衣笠名津美（スチル写真）

■主な活動

大鳥居をからだで体感！

手を広げて平安神宮の大鳥居の柱を全員で囲んだりしてその大きさを体感した。

京都市京セラ美術館

まず旧 1 階エントランス部分にて、大理石でできた壁や階段を、その制作方法についての解説を聞きながら形や大きさを味わった。

つづいて、東山キューブの 2 階テラス部分に移動。近年の増築を機に造られたタイル壁と本館外壁の既存のタイル壁について、見た目だけでは分からない質感の違いなどを手でふれて感じ取った。

最後は屋外に出て、展示スペース「ザ・トライアングル」の周りを歩いて三角形の建物のかたちを体感。また同館で展示中の「川人綾：斜めの領域」で、ラインテープを用いて制作された作品の一部に手でふれて、制作方法などを味わった。

京都国立近代美術館

続いては京都国立近代美術館へ戻り、まずは美術館のふれる建築模型をさわって建築の全体像をつかみ、自分たちのいる場所も確かめた。

その後は１階ロビーの大理石の壁や花崗岩でできた床を、手ざわりや音を頼りに体感した。また琵琶湖疏水沿いの大きなガラス窓や、アルミ、絨毯のフカフカした素材を、手のひらや足裏の感覚を使って味わい、温度、質感、音の違いなどを感じ取った。

「つくって鳴らそう建築楽器」

最後は、大理石、花崗岩、コンクリート、タイル、金属といった建材のピースを思い思いに選び、それらを土台の木材に取り付けて「建築楽器」を製作した。

主な感想

- 私たちにとって、音というのは大事な情報元の一つです。しかし、その細部や材質によっての違いや特徴など、普段気に留めないようなことを改めて体験し、感じたことで、音の奥深さや面白さといったものを知ることができました。（弱視）
- 普段物をたたくことは少なかったのですが、とても楽しくてついつい叩きすぎてしまいました。タイルが鉄のような音がしてびっくりしました。今度機会があれば行きたいです。（全盲）
- 建物に使われる材料を気にしたことはあっても、音まで気にしたことはありませんし、それを実際にたたいてみたこともありませんでした。（中略）「いくつかの発見」とは、次のようなものです。①大理石は高価な割に良い音はしないこと。②タイルについて、表面よりも裏面の方が、金属のような高い響きが得られること。③コンクリートは思ったよりも音は響くこと。これほど発見することができ、建築に興味を持つことができました。そして、それらの材料が持つ「おもしろさ」を味わうことができました。今回のワークショップを期に、いつも同じような毎日でも、小さな発見をたくさんして、充実した毎日にしていきたいと思います。（弱視）

4-3「甲斐荘楠音の全貌」展 鑑賞プログラム
「シュワー・シュワー・アワーズ　手話と日本語で鑑賞を楽しむ会」

■概要

企画展「甲斐荘楠音の全貌」展について、ろう者・難聴者・聴者（耳の聞こえる方）が、作品を見て考えたことや発見を話し合う「シュワー・シュワー・アワーズ」を実施した。開催に当たっては、美術館･博物館を中心に手話など情報保障のあるプログラムを紹介している団体「手話マップ」の協力を得た。

当日は美術館１階ロビーを会場に、手話マップのスタッフ（ろう者）がファシリテーターをつとめる形で進行。参加者一人ずつ自己紹介を行ったのちに鑑賞する作品を伝え、それぞれのペースで展覧会を鑑賞した。その後およそ１時間をかけて、モニターに映した作品画像を見ながら、感じた印象やイメージしたことなどを全員で話し合った。なお当日は２名の手話通訳者（日本手話と音声日本語）にもお越しいただいた。

日　　時｜ 2023 年 3 月 26 日（日）① 10：30 ～ 12：30　② 14：00 ～ 16：00
会　　場｜京都国立近代美術館
参　加　者｜①４名（聞こえない人３名、聞こえる人１名）
　　②４名（聞こえない人１名、聞こえる人３名）
ファシリテーター｜木下知威（手話マップ）
ス タ ッ フ｜井上友裕、川鶴和子（手話通訳）、松山沙樹、山本幸子（京都国立近代美術館）
主　　催｜手話マップ
共　　催｜新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業

主な感想

・美術館は友人と行くこともありますが、基本一人で楽しむことが多かったのでとても貴重な機会だと思い参加させていただきました。（中略）手話で楽しく共有でき、一気に世界が広がった感じです。背景や考え方、見方、いろいろあるのだなと改めて面白く興味深く感じました。（聞こえない人）

・聴者で手話はできないため、通訳をしていただくため、自分の考えや気持ちをより正確に伝えるための言葉を選ぶことが大切だと、改めて考えました。手話と日本語で鑑賞を楽しみながら、それぞれの人生がどんどんひろがっていくことを願っています。（聞こえる人）

・沈黙がなかったことも、皆が「話したい」と気持ちが前向きになっていたことを表していると思う。対話型鑑賞の対象作品のトークポイントを各々で変えているのは、最後まで飽きなかったので良かった。（聞こえない人）

5. CONNECT ⇄＿　アートで こころを こねこねしよう

文化庁による「令和４年度 障害者等による文化芸術活動推進事業」として、岡崎公園一帯のさまざまな文化施設が連携し、アートを通して多様性や共生社会について考えるプロジェクト「CONNECT ⇄＿アートで こころを こねこねしよう」が開催された（会期：2022 年 12 月 1 日～ 18 日）。

京都国立近代美術館は 2020 年・2021 年度に続き主催館として当プロジェクトに参画した。今回は、イタリアのオメロ触覚美術館についての映像作品『手でふれてみる世界』の上映会＆トーク、視覚を使わずに文化施設を体感する「無視覚流で楽しむ！ 京風まちあるき」、筆談の手法を用いた対話鑑賞プログラム「筆談鑑賞会　かく⇄みる⇄つながる」を実施した。

■開催趣旨

文化庁･京都国立近代美術館では、アートを通して、多様性や共生社会のありかたについて、障害のある方もない方も共に考え、語り合い、実践するプロジェクト「CONNECT ⇄＿（コネクト）～アートで こころを こねこねしよう～」を、2022 年 12 月 1 日（木）から 18 日（日）までの期間に開催します。

3 回目となる 2022 年度のテーマは「アートで こころを こねこねしよう」。障害者週間（12 月 3 日～ 9 日）を含む 18 日間、展示やワークショップ、連続トーク、上映会など、参加施設がさまざまなプログラムをご用意してお待ちしています。さらに、京都国立近代美術館等には交流・くつろぎスペース「こねこねの中庭」が登場。さまざまな表現や文化、歴史に触れたり、五感を使ってアートを感じたり、いろんな人と共に過ごしたりして心と心を“こねこね”してみませんか。
（CONNECT ⇄＿ウェブサイトより）

■開催概要

2022 年度 CONNECT ⇄＿アートで こころを こねこねしよう
（令和 4 年度文化庁委託事業「障害者等による文化芸術活動推進事業」）

日　　程｜ 2022 年 12 月 1 日（木）～ 18 日（日）　　入 場 料｜無料
会　　場｜京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館、京都府立図書館、ロームシアター京都、京都市動物園、日図デザイン博物館（京都市勧業館みやこめっせ地下 1 階）、京都市美術館別館
主　　催｜文化庁、京都国立近代美術館
共　　催｜京都府、京都市、京都新聞
後　　援｜ KBS 京都、エフエム京都
協　　力｜京都市京セラ美術館、京都府立図書館、ロームシアター京都、京都市動物園
特別協力｜ NHK 京都放送局

5-1『手でふれてみる世界』上映会＆トーク

■概要

手で世界にふれながら旅をし、多様な文化や芸術と出会ってきた、視覚に障害を持つアルド・グラッシーニとダニエラ・ボッテゴニ夫妻。ふたりの働きかけで 1993 年、イタリアのマルケ州アンコーナ県に「オメロ触覚美術館」が設立され、1999 年にはイタリア議会の承認を受けて、国立の美術館となりました。本作は、近代以前の彫刻のレプリカや現代作家による実物を手でふれて鑑賞できるこの美術館の活動を紹介するドキュメンタリーです。言葉による映像の解説（音声ガイド）、日本語字幕付きの、バリアフリー上映です。

今回の上映は、2022 年 11 月、ヴァンジ彫刻庭園美術館（静岡県長泉町）での初公開に次ぐ開催となります。上映会の後は、監督の岡野晃子氏、ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の普及を行う国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏によるトークを開催します。（CONNECT ⇄＿ウェブサイトより）

日　　程｜ 2022 年 12 月 3 日（土）14：00 ～ 16：00
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階講堂
参 加 者｜ 62 名
トーク出演｜岡野晃子（監督・ヴァンジ彫刻庭園美術館副館長）
聞 き 手｜広瀬浩二郎（国立民族学博物館 准教授）
協　　力｜ヴァンジ彫刻庭園美術館、シネマ・チュプキ・タバタ

■作品情報

『手でふれてみる世界』
監督：岡野晃子、上映時間：60 分、製作：2022 年（日本）、イタリア語／日本語

■実施報告

プログラムは約 60 分の上映ののち、岡野晃子監督と広瀬浩二郎氏によるアフタートークという構成で実施した。

トークでは、岡野監督がこの映画を撮り始めたきっかけや、コロナ禍での撮影の苦労が語られた。また、「みる」ことは視覚だけでなく触覚や聴覚なども総動員しながら感じる豊かな身体経験であり、“ 手でふれてみる ” 鑑賞には、視覚障害のある・なしに関わらず、美術館をよりユニバーサルな（誰もが楽しめる）場所として開いていく可能性を秘めているのではないかというお話もあった。広瀬氏もまた自身の経験を踏まえながら、「さわる鑑賞」には触れた時の印象が身体に刻まれる感覚があるということや、映画に登場したオメロ触覚美術館の学芸員たちに言及しながら、ふれてみる鑑賞をナビゲートする人たちの存在の重要性についても語られた。

主な感想

・確かにアートの鑑賞は見る、観る、のが当たり前という感覚できました。障害のある無しに関わらず、触って鑑賞する発見、楽しさがあることを知りました。日本でもイタリアのようにもっともっと広がっていくことを願います。（60 代）

・日本でもオメロ美術館のような場所があるといいと切に思います。参加出来てうれしいです。（50 代）

・私自身精神障害当事者として、精神福祉に携わりたいと考えています。文化や趣味としての「アート」の楽しさとともに、障害をもつ方が生きやすい社会をつくるために将来何ができるか、考えるきっかけになると思います。ありがとうございました。（30 代）

・この上映を何度もしてもらえたら（たくさんの方におしらせできるのに）と思いました。このような機会すらなくなるくらい、上映された内容の全てが自然なとりくみになる世の中になればと願いました。素晴らしい企画をありがとうございました。（50 代）

5-2「無視覚流」で楽しむ！ 京風まちあるき

■概要

「無視覚流」を提唱する広瀬浩二郎さんとともに、視覚を使わずに京都・岡崎エリアの文化やアートを全身で感じるまちあるきワークショップです。建築や彫刻を手でふれたり、琵琶湖疏水の音に耳を傾けたり、砂利を足で踏みしめたり、まちの匂いを嗅いだりすることで、岡崎エリアの知られざる魅力を体感してみませんか。（CONNECT ⇄＿ウェブサイトより）

日　　時｜ 2022 年 12 月 4 日（日）① 10：30 ～ 12：30　② 14：00 ～ 16：00
会　　場｜京都国立近代美術館、ロームシアター京都、京都府立図書館、京都市京セラ美術館
参　加　者｜① 13 名（うち視覚障害あり 2 名）、② 10 名
講　　師｜河本あずみ・宮崎刀史紀（ロームシアター京都）、仁科豪士・堀奈津子（京都府立図書館）、後藤結美子（京都市京セラ美術館）
ナビゲーター｜広瀬浩二郎（国立民族学博物館）、松山沙樹（京都国立近代美術館）
撮　　影｜衣笠名津美（スチル写真）、鈴木啓介（映像）

■実施報告

「感覚をひらく」事業において継続してきた“視覚だけによらない作品鑑賞の取り組み”を、「CONNECT ⇄＿」のコンセプトを踏まえて岡崎公園の他の文化施設と連携して実施した。ナビゲーターに「無視覚流」を提唱し、全国各地で講演やワークショップを行う国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏を迎えた。そして、ロームシアター京都、京都府立図書館、京都市京セラ美術館とともに、「視覚によらずに楽しめるもの・こと・場所」を洗い出し、広瀬氏を交えて現場で検証を行った。その上で、全体を通して触覚、嗅覚、聴覚などさまざまな身体感覚を使えるようなルートや活動内容を最終的に決定した。

参加者は２人１組になり、片方がアイマスクをつけ、もう片方が手引き役となって、途中でアイマスクをつける役を交代しながら活動を行った。

当日の大まかな活動内容は以下の通り。

京都国立近代美術館

ツアーの拠点は京都国立近代美術館。まずは広瀬氏から活動の趣旨について話があり、続いて触覚をひらくウォーミングアップとして、同館のさわる鑑賞ツールを、アイマスクをつけて全員でさわって対話する活動を行った。

鑑賞ツール：野田睦美《華燭》をさわりウォーミングアップ

ロームシアター京都

まずはサウスホールのホワイエ空間にて、アイマスクをつける人・手引き役になり２人１組で歩く練習を行った。

その後、サウスホールの中へ。スタッフの宮崎氏の案内のもと、舞台上を歩いたり、客席に座って耳を澄ましたり、壁や床の素材に触れたりして空間の広がり等を体感した。途中でアイマスクをつける役を交代した際、アイマスクを取った方からは「頭の中でイメージしていたよりも、実際は狭かった」という声もあった。

腕と腕で押し合って、相手のからだの動きに自分のからだを委ねる

続いてホワイエ部分に戻り、床に敷かれたタイルに触れた。ロームシアター京都は 1960 年に前川國男の設計で京都会館として建てられ、その後 2015 年の再整備工事の際に一部増改築が行われている。サウスホールのホワイエ部分の床のタイルの一部は、1960 年代の制作方法に倣って新たに作られたものであり、つまり新旧のタイルが混在している。こうしたことを踏まえ、タイルのさわり心地や角の丸みを手がかりに新旧の違いを比べ、歴史を感じ取った。

京都府立図書館

京都府立図書館では、普段は立ち入ることができない地下書庫へ特別にご案内いただいた。書庫に入った時の匂いの変化に気づいた参加者もいたようだった。ここでは、手ざわりや匂いが特徴的な本や雑誌を、順番に手に取った。

明治時代と昭和 20 年代という約半世紀の違いがある 2 冊の本のどちらの方が新しいかを当てるという活動では、手のひらや指先の感覚をはたらかせ、紙の厚みを比べたり、一方には活版印刷の凹凸があることなどを感じ取って推察を巡らせた。

また昆虫を用いて作られた装丁の本や、香りが付いた雑誌、点字印刷物なども体験し、視覚以外の感覚で本の素材や雰囲気の多様さを味わった。

京都市京セラ美術館

京都市京セラ美術館では、まず 1 階「天の中庭」に展示された彫刻作品を学芸員の後藤氏の解説を聞きながら全員で触れて鑑賞した。1 点目の山口牧生《鞍(くら)》は、作品の上側は研磨されツルツルした手ざわりである一方で、下側（裏側）に手を伸ばすと石本来のごつごつした質感を感じ取ることができ、印象の違いに参加者からは驚きの声が上がった。

2 点目に鑑賞したのは清水九兵衛《朱態》。こちらは大きな作品であるため、作品の周りを一周して大きさを体感したり、作品の曲面に触れることでその優美な形を感じ取った。

続いて本館の階段をのぼり２階の西回廊へ。この部分の床にはタイルが用いられているが、後藤氏によると、開館当初、来館者は下足室に履物を預けて素足で展示を見ていたそうで、裸足で歩いた際の冷たさを軽減するためにタイルが用いられたのではないかとのこと。そうした解説を踏まえ、参加者も手でふれたり足裏でタイルの質感や温度を感じ取った。

本プログラムでは、企画段階から各館の担当者に大いにご協力いただき、各館の特徴的な資源や専門的な知見を生かすことで、文化、歴史、アートを全身で体感する内容とすることができた。ロームシアター京都で 60 年前に造られた床と最近の床をさわり比べた際、「ここにはよく来るが床をみたのは初めて」という声もあり、ふだん見慣れていたはずの場所が、「無視覚流」を体験することで違った光景として自身の中に立ち上がってくる契機になったとも言えるのではないだろうか。

一方で課題点もある。第一に、２時間で３か所を巡るというタイトな構成になったため、１か所あたりの活動時間が限られ、じっくりと味わい、意見を交わす活動が十分に行えなかった。また岡崎公園には琵琶湖疏水や平安神宮の大鳥居、木々や植物、建築など身体感覚で楽しむことができる場所がまだまだある。今後、こうしたリソースを十分に活用したツアーの可能性もあるだろう。また、各施設が「無視覚流」で体感できるもの・ことを洗い出す機会になったと思うので、各館が独自のプログラムとして実施していくことも今後の展開の一つとして記しておきたい。

主な感想

- 視覚と触覚の違い､その差の大きさに驚きました。でも最後のまとめで｢どちらかが正解ではない｣という広瀬さんのお話を聞き、自分がいかにこれまでの経験にとらわれているかに気づき、はっとしました。良い時間をありがとうございました。
- もう少し時間が長いと良いと思いました。施設のバックヤードも体験できて、楽しかった。
- 健常者の方々と一緒にワークショップに参加させていただいたことで、普段視覚を使っている方がアイマスクをつけた時にどんなことを感じるのか、お話を聞けて新鮮に感じた。他の参加者さんの中で今回の体験が、見えないことの不安や恐怖心ではなく、楽しい経験として記憶に残っていたら良いなと思う。
- 視覚をなくした状態で初対面の方にすべてをゆだねて歩いたり、いろんなものをふれたりするのが最初はとても恐怖心がありました。時々、視覚障害者の方のお買い物サポートをしますが、声掛けで初対面の私の案内を受け入れてくださったその方にとても感謝します。
- このような企画がもっと日常的に、気軽に体験できるプログラムがあれば面白いと思いました。

5-3　筆談鑑賞会「かく⇄みる⇄つながる」

■概要

声を使わずに「かく」ことでアートを鑑賞してみませんか。このプログラムでは、耳の聞こえない鑑賞案内人の小笠原さんと一緒に、作品を見て感じた印象や浮かんだ疑問を文字や絵をかくことで伝え合います。新しい意見や感じ方にふれることで、どんな新しい気づきがあるでしょう。聞こえる人と聞こえない／聞こえにくい人が一緒に楽しめるプログラムです。（CONNECT ⇄__ウェブサイトより）

日　　時｜ 2022 年 12 月 18 日（日）
　　① 11：00 ～ 12：30　② 14：30 ～ 16：00
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階講堂・ロビー
参　加　者｜① 11 名（うち聴覚障害あり 2 名）
　　② 11 名（うち聴覚障害あり 1 名）
ファシリテーター｜小笠原新也（耳の聞こえない鑑賞案内人）
撮　　影｜守屋友樹（スチル写真）、鈴木啓介（映像）

■実施報告

聞こえる･聞こえないに関わらず、ともに作品を鑑賞するプログラムとして、文字や絵を「かく」ことで､作品についての発見や疑問を共有し対話を深めていく筆談鑑賞会を実施した｡ナビゲーターとして、徳島県立近代美術館や東京都の「TURN」プロジェクト等で筆談鑑賞に携わってきた小笠原新也氏の協力を得て、京都国立近代美術館の作品 2 点を用いた鑑賞会を企画・実施した。また当日は、京都聴覚言障害者福祉協会から手話通訳者を 4 名派遣していただいた。

当日の流れは以下の通り。

①自己紹介・導入

全員で円形に座ってスタート。

筆談で用いる色鉛筆を一人一色ずつ選び、選んだ色とその理由を発表した。

②鑑賞のルールを確認

小笠原氏がスライドを使いながら、「絵をじっくり見よう」「何人でも、同じ時に書いて OK」「ほかの人が書いたことに続けてもいい」など、筆談鑑賞のルールを紹介した。

③鑑賞 1（約 20 分）

1 つ目の鑑賞作品は、土田麦僊《罰》。

2 グループに分かれ、模造紙に文字や絵を書き込みながら鑑賞を進めた。

「登場人物たちは何をしているところだろう？」「手に持っているものはなんだろう」「どうしてこんな表情をしているのかな？」と各自の心に浮かんだ印象や疑問が文字やイラストとなって紙の上にじわじわと広がっていった。ファシリテーターは模造紙の全体を見渡し、同じキーワードや話題に線を引くことでつながりを可視化したり、対話が深まりそうな問いかけを書き込んだりした。

鑑賞後に、それぞれのグループの書き込みを見ながら対話を振り返った。

④鑑賞 2（約 20 分）

つづいては、京都国立近代美術館 1 階ロビーにある、リチャード・ロング《京都の泥の円》を 1 作品目とグループのメンバーを変えて鑑賞した。

こちらは実物の作品を目の前にして行ったため、参加者は作品に近寄ったり離れたりして細部の質感なども手がかりにしながら鑑賞を進めていった。1 作品目と同じく鑑賞終了後に、それぞれのグループの模造紙を眺める時間を設けた。

⑤振り返り

最後に再び円になって座り、一人ずつ感想を共有したのち、ファシリテーターが今回のプログラムの目的などに触れながらまとめを行った。

作品の実物をみんなで鑑賞

2 作品目は、作品の形に合わせて丸い模造紙とした

今回は、具象的な作品である《罰》と抽象度の高い《京都の泥の円》を用いたが、作品の特徴によって対話の広がり方が異なっていた。《罰》は、三人の登場人物や場所・もの（廊下、時間割や地球儀など）といった具体的なモチーフがあるため、絵の中で起きている物語を想像しやすかったようだ。一方で《京都の泥の円》は、まずは「ドーナツのよう」「太陽のよう」といった見立てや「ざらざらとしている」といった質感や技法に関する書き込みから始まり、対話が進むにつれて想像が膨らみ、作品にまつわるストーリーが生まれてきたようだった。

また本プログラムは京都国立近代美術館では初めての筆談鑑賞の取り組みで、一般的に行っている「声」による対話鑑賞との違いを考える機会にもなった。声による鑑賞では一人ずつ順番に話すことが常で、ほかの人が自分と同じ意見を先に述べてしまうと、重複して意見を言いづらいという場合もあるのではないだろうか。一方で筆談鑑賞では、対話が一方通行ではなく、同時多発的に広がっていくため、同じ気づきや疑問が紙のあちこちに書かれることもある。ファシリテーターがそれらを結びつけていくことで、参加者は「同じ意見の人がいた」と気づくことができる。また参加者から「初対面の人に声でいきなり自分の意見を伝えることよりも、筆談をする方が心理的なハードルが低かった」という感想もあり、非常に興味深く受け止めた。

いまだ効果の検証や分析は不十分だが、筆談鑑賞には、声による鑑賞や手でふれて対話する鑑賞とは異なる、まなざしの共有や鑑賞者の関係構築の特徴があるのではないかと感じている。今後もさまざまな作品で筆談鑑賞を実践し、意義や特徴を多くの人と共有していきたい。

主な感想

- ものとかアートだけではなく「つくること」とは、人と一緒に想像をして、コミュニケーションをはかることなのだと実感した。人の数だけものの見方があるんだ。だからこそ、人と対話するのはおもしろい、と思った。（20 代）
- とても楽しい、心がワクワクする体験でした。みなさんと作品を鑑賞する企画でしたが、作者さんと同じように わたしはみなさんとひとつの作品を作った、共にエネルギーを使って「かく⇄みる⇄つながる」作品を作った気持ちです。ありがとうございました。（40 代）
- 楽しめました。ろう者にとって、ろう者のファシリテーターがいらっしゃることで、より参加しやすく楽しむ事ができました。次回もお願いします！（40 代／聴覚障害あり）
- とてもよい取り組みなのに情報が限られている。市役所とか福祉センターにまったく情報がないのが不思議。
- 満足感のある鑑賞会でした。言葉が残る筆談は、他者とじっくり向き合い対話することができるツールでもあるのだと気づかされました。障がいがあるなし関係なく、同じような形で、友人と筆談鑑賞会をやってみようと思います！（30 代）

6. 研究会「ひらくラボ」

■概要

「感覚をひらく」事業のこれまでの活動を振り返るとともに、「視覚だけに依らない鑑賞活動」や「絵画作品を視覚以外の感覚で共有する取り組み」について、各地の美術館関係者と考えるクローズドな研究会を行った。

各日のテーマ、概要は以下の通り。

(1)「美術館は、視覚だけに依らない鑑賞経験をどのようにデザインできるか」

日　　時｜2023年3月11日（土）13：30～17：00
ゲ　ス　ト｜中村裕太（作家）、藤吉祐子（国立国際美術館）
コーディネーター｜佐藤優香（東京大学大学院情報学環、本事業実行委員）
会　　場｜京都国立近代美術館1階講堂
参 加 者 数｜22名

視覚だけに依らない鑑賞活動について、①感覚をひらく事業での「ABCプロジェクト」および「手だけが知ってる美術館」ワークショップ、②国立国際美術館でのジャコメッティをテーマにしたプログラム「視覚を超えた鑑賞探求ワークショップ－見れば　見るほど　見えなくなる　ジャコメッティ《ヤナイハラⅠ》を徹底的に鑑賞しよう」、③小林古径美術館での「手から味わうお茶会」の事例紹介を、それぞれに携わったゲストおよびコーディネーターが行った。

後半は、参加者から寄せられたコメントを踏まえながら「何のためにさわるのか」「能動的に鑑賞できるような場づくり」「鑑賞する作品の選定やレプリカを活用する意義といったトピックをめぐり、全体で意見交換を行った。

(2)「美術館は、『絵にさわる』(絵画作品を二次元の触図を通して伝える)体験をどのようにデザインし、届けることができるか」

日　　時｜ 2023 年 3 月 12 日(日)13：30 ～ 17：00
ゲ　ス　ト｜藤島美菜(愛知県美術館)、岡本裕子(岡山県立美術館)
コーディネーター｜広瀬浩二郎(国立民族学博物館、本事業実行委員)
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階講堂
参 加 者 数｜ 25 名

冒頭に、「感覚をひらく」事業で 2017 年から継続している「さわるコレクション」の制作に触れながらこの日のテーマを共有した。

つづいて事例紹介として、所蔵作品の触図の制作・活用に先進的に取り組む愛知県美術館と岡山県立美術館における実践事例と、そこから得た経験等を共有いただいた。

そして参加者もそれぞれの美術館の触図を手でふれて体験したのち、最後は全員でディスカッションを行った。触図制作における工夫点や、活用の方法やねらいをどのように設定するべきかといった点を中心に、参加者からも積極的な発言があった。

２日間の研究会を通して、視覚だけに依らない鑑賞の取り組みは対象者や目的に応じてさまざまな方向性があること、そして全国の美術館で今まさに模索段階であることが示された。また両日ともに終了時間を超えてもディスカッションが続き、参加者の熱意をひしひしと感じることとなった。

美術館におけるユニバーサルな取り組みはいまだ発展途上にあり、だからこそ今回のように関係者が集い、プログラムを組み立てる過程やそこでの気づき・悩みを共有して共に考える場が必要ではないかと感じた。今回は試行的な開催ではあったが、「感覚をひらく」事業が情報やネットワークのハブとして機能する可能性について、今後も検討したいと考えている。

[参加者の所属(50 音順)]
愛知県立大府もちのき特別支援学校、秋田県立近代美術館、愛媛県立美術館、大阪教育大学、京都市立芸術大学、国立アートリサーチセンター、国立アイヌ民族博物館、国立西洋美術館、埼玉県立近代美術館、滋賀県立美術館、東京都現代美術館、東京都写真美術館、東京都庭園美術館、名古屋市美術館、新潟市美術館、八戸市美術館、放送大学、北海道大学、三重県立美術館

おわりに

今年度の「感覚をひらく」では、年間を通して 10 本の鑑賞ワークショップやイベントを実施してきました。また、美術館をハブとしたネットワークづくりの第一歩として、美術館関係者の方々と「みる」ことだけに依らない鑑賞を考える研究会を行うことができました。ご参加いただいた方、ご協力くださった全ての方へ御礼申し上げます。

９月の「手だけが知ってる美術館」は、背景や感性、経験、年齢の異なる方々が集まって行う久しぶりのワークショップとなりました。参加者の皆さんは作品に一斉に手を伸ばし、感じた印象や作家の意図を想像しながら言葉を交わし、鑑賞を進めていきました。最初は、たくさんの「なんでだろう」や「うーん、わからない……」があり、見えない人も見える人も心と身体をたくさん動かして一緒に考えていきます。それを繰り返していくうちに新しい発見や気づきがあり、一人一人の気持ちが動きはじめ、場の空気がだんだん温まっていくのを感じました。

ワークショップを終えて、参加された方に「感覚をひらく」の活動の醍醐味についてお話を伺った時のことです。お一人の見えない方が「ひとつの作品をじっくり味わうことで、時間の感覚を見直すことができる気がしています」と話してくださいました。美術館で他者と共に作品をさわって鑑賞する経験は、日常生活に戻ってからどんな風に一人一人の中に残っていくのだろうかと気になっていた私は、この言葉に胸を打たれました。

作品を囲んで、ああでもない、こうでもないとコミュニケーションを重ねることは、まどろっこしく、時間がかかります。時にはモヤモヤした感情を抱えたまま鑑賞が終わることもしばしば。ですが「感覚をひらく」では、そんな“ややこしさ”こそ大事にしたいと思っています。肩の力を抜いて１つのものと時間をかけて対峙することや、正解のないものについて思いを巡らすこと、また他者の考えにふれたり自分自身の価値観や過去の記憶と改めて向き合ったりすること。美術館という日常から少し離れた空間で、作品を媒介にして色々な人と過ごすからこそ生まれるこうした“もの”や“こと”を大切にしながら、引き続き「感覚をひらく」の活動を進めていきたいと考えています。

令和５年３月末日

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会
事務局（京都国立近代美術館 研究員）
松山 沙樹

【付録】新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会規約

（名　称）
第１条　本実行委員会は、新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会（以下「実行委員会」という。）と称する。

（目　的）
第２条　実行委員会は、美術館の特性を活かしながら、地域の美術館・博物館、特別支援学校、大学等のネットワークを構築し、障害の有無に関わらず誰もが楽しめるユニバーサルな美術鑑賞プログラムを創造推進することを目的とする。

（事務局）
第３条　事務局は事業中核館（京都国立近代美術館）に置く。
２　事務局に事務局長を置く。 事務局長は、中核館（京都国立近代美術館）総務課長がその任にあたる。
３　前２項に定めるもののほか、事務局の運営に関して必要な事項は、委員長が定める。

（事　業）
第４条　実行委員会は、第２条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。
（１）新たな美術鑑賞プログラムの構築に向けた各種行事の開催に関すること。
（２）障害者に向けた美術館活動、文化事業等についての調査・研究。
（３）新たな美術鑑賞プログラムの構築に向けた情報発信に関すること。
（４）その他、第２条に掲げる目的を達成するために必要な事業。

（所掌事務）
第５条　実行委員会は、第２条に掲げる目的を達成するため、次の各号に掲げる事務を行う。
（１）事業の企画及び実施に関すること。
（２）事業に必要な資金についての計画及び調達に関すること。
（３）事業における関係団体との連絡調整に関すること。
（４）事業の検証・評価に関すること。
（５）前各号に定めるもののほか、設置目的を達成するために必要な事務。

（組　織）
第６条　実行委員会の構成は、別表のとおりとする。
（１）実行委員会に、委員長、副委員長、事務局長、監事を置く。
（２）委員長は、事業中核館の代表者（京都国立近代美術館）をもって充てる。
（３）副委員長、事務局長及び監事は、委員長が指名する。
（４）委員長は、委員会を代表し、会務を総括する。
（５）副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は欠けたときは、その職務を代理する。
（６）事務局長は、実行委員会事務局を総括する。
（７）監事は、委員会の会計及び事務を監査する。

（補　足）
第７条　この規約に定めるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な事項については、委員長が定める。

附　則
この規約は、令和４年９月１日から施行する。

謝辞

本事業の実施にあたり、以下の皆様をはじめ多くの方々からご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）

八代清水六兵衛

有馬楓、岩本麻子、清田菜央、小林加代子、紺野果凛、髙野晋弘、立岡伶菜、仲村健太郎

映像撮影：鈴木啓介、江村一範（Actual Inc.）

令和 4 年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業）

感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業
令和 4 年度 実施報告書

企画・制作　京都国立近代美術館 教育普及室
松山沙樹
牧口千夏
吉澤あき

デザイン　桑田知明
印刷・製本　株式会社グラフィック
発　行　令和 5 年 3 月 31 日
発行者　新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会
〒 606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1　京都国立近代美術館内
TEL. 075-761-4111（代表）　FAX. 075-771-5792
https://www.momak.go.jp/senses
© 京都国立近代美術館　無断転載厳禁

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

本報告書は、「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」（令和４年度 文化庁Innovate MUSEUM 事業」の一環として発行するものです。
© The National Museum of Modern Art, Kyoto